

実習指導者－教員の協働状況と ユニフィケーション活動との関係

吉川 洋子・石橋 照子・梶谷みゆき・平野 文子
高橋恵美子・川田 良子*1・曾田 教子*1・狩野 京子*2
落合 永美*2・伊藤千加子*2

概 要

本研究の目的は、実習における実習指導者－教員の協働に関わる現状を把握し、指導体制およびユニフィケーション活動が実習指導者－教員の協働的な活動に及ぼす影響を明らかにすることである。A大学看護教員と実習先の2施設の実習指導者（以下、指導者）に無記名自記式質問紙調査を実施した。51の有効回答を分析した結果、意思決定、協調性、情報共有において、教員が指導者よりも協働の認識は高く、協調性、情報共有に有意差が見られた。

実習指導者－教員の協働に、ユニフィケーション活動の企画・実施した者が3因子とも高く、協調性に有意差があった。ユニフィケーション活動の場や機会が両者のコミュニケーションを促進し、実習指導の協働に影響を与えることが示唆された。

キーワード：ユニフィケーション、実習指導者、教員、協働状況

I. はじめに

看護教育における臨床と教育の乖離という問題に対して、臨床と教育の相互の交流や連携を深める仕組みが必要になっている。米国において1960年代にユニフィケーションの取り組みが始まり、日本にも1980年代に紹介され、教育、実践、研究の3つの機能を連携・協働することにより、看護実践および教育の質の向上を図る取り組みが始まっている（市村，2011）。看護実践能力の高い看護職を育てるには、教育の場と臨床の場の連携によって効果的な教育がなされることが不可欠である。本学のように附属病院を持たない教育機関においては、いかに臨床と教育の連携を図っていくかが重要な課題である。そこで、2つの異なる組織において、看護

連携型ユニフィケーションとして取り組んでいる高知医療センター看護局、高知県立大学看護学部の活動を参考に教育や看護実践の質の向上を図るユニフィケーション活動を2011年より開始した。

これまでに、ユニフィケーション活動の導入や成果については報告されている（市村，2011；吉村，2008；吉川，2010）が、臨地実習への影響を報告した研究は見当たらない。

本研究では、指導者と教員の協働が不可欠な看護学実習における協働に関わる現状を把握し、ユニフィケーション活動が指導者と教員の協働的活動に対する影響を調べた。

II. 研究目的

実習における実習指導者－教員の協働に関わる現状を把握し、指導体制およびユニフィケーション活動が協働的な活動に及ぼす影響を明らかにする。

*1 鳥根県立こころの医療センター

*2 鳥根県立中央病院

Ⅲ. 研究方法

1. 対象

A大学の臨地実習施設である約650床の総合病院、240床の精神科病院の2施設の指導者39名とA大学看護教員26名に質問紙を配布し59名より回答を得、記載不備を除く51名（有効回答率86.4%）を対象とした。

2. ユニフィケーション活動の状況

2012年度、調査までに臨床と教育が連携して実施する学習会・事例検討会を14回実施した。内容は、教員が可能なテーマを提供し、病院のニーズとマッチしたテーマで行った。学習会・事例検討会は病棟単位で実施し、病棟の担当者と教員が企画から実施を協働で行った。

調査は2012年11～12月に実施した。

3. 調査内容

- 1) 対象の属性：年齢、所属、看護職経験年数、実習指導経験年数
- 2) 椎葉（2010）により開発された28項目からなる協働測定尺度を用いた。この尺度は下位尺度「意思決定」「情報共有」「協調性」で構成され、信頼性について確認されている。「1：いつもそうしている」から「5：していない」の5段階評定を用いた。椎葉は、協働を指導者と教員が、互いの資質や能力を尊重し、看護学生の実習目的到達のために意思決定、協調、情報共有を行うことと定義しており、本研究でも同様に考えた。
- 3) 実習指導体制：専任、兼任の別
- 4) 学習会や事例検討会などのユニフィケーション活動状況について調査した。

4. 分析方法

- 1) 協働測定の各因子項目の平均得点を算出して協働特性を把握した。椎葉（2010）の用いた回答を逆転させ、「いつもそうしている」を5とし、「していない」を1として数値化した。得点が高いほど協働ができていることを示す。

- 2) 協働に影響する要因は、実習指導体制、ユニフィケーションによる活動状況を独立変数、協働因子を従属変数とし、マン-ホイットニーのU検定を用いて協働因子の比較を行った。統計学的有意水準は5%とし、統計解析にSPSS17.0 for Windowsを使用した。

5. 倫理的配慮

A大学研究倫理審査委員会の承認を得た。調査の目的、方法、結果の扱い方、協力の自由意思、個人や所属する施設は特定されないこと、知り得た情報は厳重に管理することを明記し、文書で説明した。質問紙は無記名とし回収には用意した封筒に厳封し回収した。自主提出をもって同意とみなした。

Ⅳ. 結 果

1. 指導者及び教員の特性

指導者は平均37.9歳で40歳代が16名（51.6%）と最も多く、次いで30歳代が10名（32.3%）と多かった。看護職経験15.2年、臨床指導経験3.2年であった。教員は平均41.3歳で50歳代が8名（38.1%）と最も多く、次いで30歳代6名（28.6%）と多かった。看護職経験8.2年、教育経験11.6年であった（表1）。

表1 調査対象者の背景

	n	平均年齢（歳）	看護職経験（年）	指導経験（年）
指導者	31	37.9	15.2	3.2
教員	20	41.3	8.2	11.6

2. 協働特性

協働の平均得点は 3.72 ± 1.06 で、各因子の平均得点は、意思決定 3.65 ± 0.83 、協調性 3.88 ± 0.744 、情報共有 3.67 ± 0.77 であった（表2）。

表2 協働特性各因子得点

各因子	意思決定	協調性	情報共有
Mean・SD	3.65 ± 0.83	3.88 ± 0.74	3.67 ± 0.77

協働に関する調査項目と全体、指導者、教員の平均得点・標準偏差および指導者、教員の比較の結果を表3に示した。

表3 協働に関する調査項目と平均得点・標準偏差

因子	項目 5. いつもそうしている 4. ほとんどそうしている 3. ときどきそうしている 2. たまにそうしている 1. していない	全体		指導者		教員		p値
		Mean	S D	Mean	S D	Mean	Mean	
意思決定	1. 実習指導の今後の方向性について指導者(教員)と意見が違えば話し合っ解決するようにしている。	3.90	1.06	3.71	1.04	4.20	1.06	0.04
	2. 実習指導がどのような問題を抱えているか指導者(教員)と議論している。	3.22	1.06	3.06	1.00	3.45	1.15	0.21
	3. 実習指導の問題には指導者(教員)と互いに意見を出し合い解決するようにしている。	3.61	1.04	3.39	1.02	3.95	1.00	0.03
	4. 対応の難しい学生への関わりについて指導者(教員)とどのようにすればよいかを議論している。	4.04	1.06	3.97	1.05	4.15	1.09	0.43
	5. 実習中に予期せぬ事態が生じた場合指導者(教員)と今後の対策を話し合っている。	4.29	0.94	4.29	0.94	4.30	0.98	0.93
	6. 学生が実習指導に不信感を抱いている時はそれを解消するために指導者(教員)と学生への対応を一致させている。	3.67	1.11	3.61	1.09	3.75	1.16	0.49
	7. 実習指導の今後の方向性に関して指導者(教員)と互いの意見を活かしあっている。	3.41	1.12	3.29	1.01	3.60	1.27	0.15
	8. 実習指導の今後の方向性は指導者(教員)と提案し合っている。	3.37	1.18	3.29	1.19	3.50	1.19	0.54
	9. 学生の実習目標到達度は指導者(教員)と一致させている。	3.61	1.23	3.65	1.28	3.55	1.19	0.71
	10. 医療事故を起こさないように指導者(教員)と話し合っている。	3.67	1.13	3.58	1.23	3.80	0.95	0.70
	11. 実習指導の方法を指導者(教員)と話し合うことが多い。	3.31	1.03	2.97	0.98	3.85	0.88	0.00
協調性	12. 指導者(教員)を見たら声をかけている。	4.18	0.89	3.97	0.84	4.50	0.89	0.02
	13. カンファレンスは互いのスケジュールを配慮し行っている。	3.67	1.24	3.58	1.29	3.80	1.20	0.59
	14. 指導者(教員)とは互いに助け合っている。	3.98	1.05	3.81	1.08	4.25	0.97	0.10
	15. 日ごろ指導者(教員)とあいさつをしている。	4.57	0.92	4.58	0.67	4.55	1.23	0.19
	16. 指導者(教員)と実習中気づいた情報や意見を自由に交換できている。	4.20	1.00	4.10	0.98	4.35	1.04	0.20
	17. 指導者(教員)と気軽に実習指導以外の話もできている。	2.98	1.41	2.84	1.34	3.20	1.51	0.37
	18. 指導者(教員)と協力して実習指導がよりよいものとなるようにしている。	3.84	0.99	3.68	1.01	4.10	0.91	0.08
	19. 指導者(教員)と協力して実習内容の充実を力注いでいる。	3.61	0.94	3.39	0.88	3.95	0.95	0.01
	情報共有	20. 学生が納得した指導を受けられるよう指導者(教員)と学生の意向を共有している。	3.45	1.05	3.35	1.05	3.60	1.05
21. 学生への指導内容は指導者(教員)と共有している。		3.57	0.94	3.32	0.83	3.95	1.00	0.02
22. 指導を受けた学生の反応を指導者(教員)と共有している。		3.47	1.03	3.32	0.98	3.70	1.08	0.18
23. 学生の今後の指導の方向性について指導者(教員)と了解している。		3.43	1.15	3.35	1.11	3.55	1.23	0.43
24. 指導のスケジュールに変更があった場合その理由を指導者(教員)と了解している。		3.84	1.08	3.84	0.97	3.85	1.27	0.61
25. 指導の効果の確認になる学生の情報を指導者(教員)と共有している。		3.57	1.06	3.45	1.00	3.75	1.16	0.12
26. 学生に困っている兆候がないか指導者(教員)と確認している。		3.78	0.97	3.48	1.00	4.25	0.72	0.00
27. 学生のよい情報を指導者(教員)と共有している。		3.94	0.95	3.77	0.85	4.20	1.06	0.02
28. 学生の問題行動に関して指導者(教員)と指導方法を相談している。		4.00	0.96	3.97	0.95	4.05	1.00	0.68

意思決定の個別項目で平均得点が4.0以上と高かったのは、「対応の難しい学生への関わりについて指導者(教員)と今後の対策を話し合っている」「実習中に予期せぬ事態が生じた場合指導者(教員)と今後の対応策を話し合っている」であった。反対に平均得点が3.3以下の低かった項目は、「実習指導がどのような問題を抱えているか指導者(教員)と議論している」であった。

協調性で平均得点が高い項目は、「指導者(教員)を見たら声をかけている」「日ごろ指導者(教員)とあいさつをしている」「指導者(教員)と実習中気づいた情報や意見を自由に交換できている」であった。反対に平均得点が低い項目は「指導者(教員)と気軽に実習指導以外の話もできている」であった。

情報共有で平均得点が高い項目は、「学生の問題行動に関して指導者(教員)と指導方法を相談している」であった。

3. 指導者と教員の協働特性

指導者と教員の各因子平均得点では、教員が3因子とも高く、協調性、情報共有に有意差があった(< 0.05)(表4)。個別項目では、「実習指導の方法を指導者(教員)と話し合うことが多い」「指導者(教員)と協力して実習指導の充実を力注いでいる」「学生に困っている兆候がないか指導者(教員)と確認している」(< 0.01)、「実習指導の今後の方向性について指導者(教員)と意見が違えば話し合っ解決するようにしている」「実習指導の問題には指導者(教員)と互いに意見を出し合い解決するようにしている」「指導者(教員)を見たら声をかけている」「学生への指導内容は指導者(教員)と共有している」「学生の良い情報を指導者(教員)と共有している」(< 0.05)など今後の方向性、指導方法の話合いなど8項目に有意差があった。各平均得点はすべて教員が高かった。

表4 臨床指導者と教員の協働特性各因子得点

	n	意思決定	協調性	情報共有
指導者	31	3.53 ± 0.84	3.74 ± 0.66	3.54 ± 0.74
教員	20	3.83 ± 0.81	4.09 ± 0.82	3.88 ± 0.80

マン・ホイットニーのU検定 * : p<0.05

3. 協働に影響する要因

1) 指導体制

臨床指導者の指導体制は専任が7名、兼任が24名と兼任による指導体制が多かった。

影響要因として、指導体制が専任か兼任かでは専任群が3因子とも高かったが有意差はなかった(表5)。個別項目でも有意差はなかった。

表5 指導体制による協働に影響する要因

	n	意思決定	協調性	情報共有
専任	7	3.82 ± 0.65	4.02 ± 0.50	3.81 ± 0.52
兼任	24	3.44 ± 0.88	3.66 ± 0.69	3.46 ± 0.78

マン・ホイットニーのU検定 n.s.

2) ユニフィケーション活動の有無

ユニフィケーション活動を企画および実施ありが17名、なしが34名であった。ユニフィケーション活動の有無ではユニフィケーション活動群が3因子とも高く、協調性に有意差があった(< 0.05) (表6)。個別項目では、「学生が実習指導に不信感を抱いている時はそれを解消するために指導者(教員)と学生への対応を一致させている」「医療事故を起こさないように指導者(教員)と話し合っている」「気軽に実習指

表6 協働に影響する要因

協働影響要因	n	意思決定	協調性	情報共有
ユニフィケーション活動企画				
企画あり	17	3.91 ± 0.54	4.16 ± 0.59	3.95 ± 0.47
企画なし	34	3.51 ± 0.92	3.74 ± 0.77	3.53 ± 0.86
ユニフィケーション活動参加状況				
活動2回以上	34	3.83 ± 0.49	4.06 ± 0.57	3.83 ± 0.58
活動2回未満	17	3.28 ± 1.2	3.52 ± 0.92	3.37 ± 1.01

マン・ホイットニーのU検定 * : p<0.05

導以外の話ができている」の3項目で有意差があった(< 0.05) (表7)。

ユニフィケーション活動の参加状況において、2回以上参加した34名、2回未満が17名であった。ユニフィケーション活動を企画および実施ありでかつ2回以上参加が14名あった。

2回以上の活動参加群が3因子とも高く、協調性に有意差があった(< 0.05) (表6)。個別項目では、「学生が実習指導に不信感を抱いている時はそれを解消するために指導者(教員)と学生への対応を一致させている」「気軽に実習指導以外の話ができている」(< 0.01)の2項目であった(表7)。

V. 考察

1. 指導者と教員の協働状況

3因子の中で意思決定の協働得点が低く、指導者、教員共に協働できていないと認識してい

表7 ユニフィケーション活動と協働得点

因子	項目 5. いつもそうしている 4. ほとんどそうしている 3. ときどきそうしている 2. たまにそうしている 1. していない	ユニフィケーション企画					ユニフィケーション活動参加				
		あり n=17	なし n=34	Mean	S D	p値	2回以上 n=34	2回未満 n=17	Mean	S D	p値
意思決定	1. 実習指導の今後の方向性について指導者(教員)と意見が違えば話し合って解決するようにしている。	4.18	1.01	3.76	1.07	0.11	4.06	.814	3.59	1.417	0.44
	2. 実習指導がどのような問題を抱えているか指導者(教員)と議論している。	3.24	0.83	3.21	1.17	0.93	3.29	.871	3.06	1.391	0.61
	3. 実習指導の問題には指導者(教員)と互いに意見を出し合い解決するようにしている。	3.76	0.97	3.53	1.08	0.49	3.79	.845	3.24	1.300	0.14
	4. 対応の難しい学生への関わりについて指導者(教員)とどのようにすればよいかを議論している。	4.41	0.80	3.85	1.13	0.07	4.24	.819	3.65	1.367	0.17
	5. 実習中に予期せぬ事態が生じた場合指導者(教員)と今後の対策を話し合っている。	4.59	0.62	4.15	1.05	0.11	4.50	.663	3.88	1.269	0.06
	6. 学生が実習指導に不信感を抱いている時はそれを解消するために指導者(教員)と学生への対応を一致させている。	4.12	0.78	3.44	1.19	0.05	3.91	.866	3.18	1.380	0.04
	7. 実習指導の今後の方向性に関して指導者(教員)と互いの意見を話しあっている。	3.65	0.79	3.29	1.24	0.46	3.65	.849	2.94	1.435	0.07
	8. 実習指導の今後の方向性は指導者(教員)と提案し合っている。	3.71	0.69	3.21	1.34	0.29	3.62	.817	2.88	1.616	0.13
	9. 学生の実習目標到達度は指導者(教員)と一致させている。	3.82	1.13	3.50	1.29	0.42	3.85	1.019	3.12	1.495	0.09
	10. 医療事故を起こさないように指導者(教員)と話し合っている。	4.18	0.64	3.41	1.23	0.03	3.82	.869	3.35	1.498	0.41
	11. 実習指導の方法を指導者(教員)と話し合うことが多い。	3.41	0.80	3.26	1.14	0.69	3.35	.884	3.24	1.300	0.69
協調性	12. 指導者(教員)を見たら声をかけている。	4.29	0.69	4.12	0.98	0.72	4.29	.836	3.94	.966	0.19
	13. カンファレンスは互いのスケジュールを配慮し行っている。	4.00	1.00	3.50	1.33	0.26	3.88	1.094	3.24	1.437	0.14
	14. 指導者(教員)とは互いに助け合っている。	4.35	0.70	3.79	1.15	0.10	4.18	.797	3.59	1.372	0.18
	15. 日ごろ指導者(教員)とあいさつを交わしている。	4.82	0.39	4.44	1.08	0.23	4.74	.448	4.24	1.437	0.57
	16. 指導者(教員)と実習中気づいた情報や意見を自由に交換できている。	4.35	0.86	4.12	1.07	0.46	4.38	.817	3.82	1.237	0.08
	17. 指導者(教員)と気軽に実習指導以外の話もできている。	3.59	1.33	2.68	1.36	0.03	3.35	1.346	2.24	1.251	0.01
	18. 指導者(教員)と協力して実習指導がよりよいものとなるようにしている。	4.06	0.83	3.74	1.05	0.29	3.91	.933	3.71	1.105	0.55
	19. 指導者(教員)と協力して実習内容の充実力を注いでいる。	3.82	0.88	3.50	0.96	0.26	3.71	.871	3.41	1.064	0.44
情報共有	20. 学生が納得した指導を受けられるよう指導者(教員)と学生の意向を共有している。	3.82	1.01	3.26	1.02	0.08	3.56	.860	3.24	1.348	0.50
	21. 学生への指導内容は指導者(教員)と共有している。	3.82	0.81	3.44	0.99	0.22	3.62	.853	3.47	1.125	0.81
	22. 指導を受けた学生の反応を指導者(教員)と共有している。	3.76	0.97	3.32	1.04	0.15	3.65	1.012	3.12	.993	0.08
	23. 学生の今後の指導の方向性について指導者(教員)と了解している。	3.88	0.70	3.21	1.27	0.10	3.65	.950	3.00	1.414	0.13
	24. 指導のスケジュールに変更があった場合その理由を指導者(教員)と了解している。	4.06	0.97	3.74	1.14	0.37	4.06	.814	3.41	1.417	0.13
	25. 指導の効果の確認になる学生の情報を指導者(教員)と共有している。	3.82	0.64	3.44	1.21	0.46	3.68	.912	3.35	1.320	0.62
	26. 学生に困っている兆候がないか指導者(教員)と確認している。	4.12	0.49	3.62	1.10	0.10	3.91	.793	3.53	1.231	0.35
	27. 学生のよい情報を指導者(教員)と共有している。	4.29	0.59	3.76	1.05	0.08	4.15	.702	3.53	1.231	0.07
	28. 学生の問題行動に関して指導者(教員)と指導方法を相談している。	4.00	0.71	4.00	1.07	0.57	4.18	.716	3.65	1.272	0.20

た。指導者、教員間の有意差はなかった。指導者と教員が「実習指導の問題の議論」、「実習指導の方法の話合い」、「今後の方向性の提案」について話し合いや議論が十分にできていないと認識し、反対にできているとしたのは「予期せぬ事態が生じた場合の話合い」、「対応の難しい学生への関わり」と問題への対応であった。この結果は、椎葉（2010）の調査結果でも類似した結果が得られていた。予期せぬ事態や対応の難しい学生など実習中の必要にせまられることがらに対して協働して取り組んでいることが考えられる。しかし、実習指導方法や今後の方向性など、実習指導の質の向上に関する議論については日常的には行っていないことがわかった。

協調性において、声をかける、あいさつをする、実習中気づいた情報や意見交換はできていると認識している一方で、気軽に実習指導以外の話もでき、協力して実習内容の充実に力を注ぐという認識は低かった。また情報共有において、学生の問題行動に関しての相談はできているが、今後の指導の方向性についての了解は低い認識であった。

これらのことから指導者と教員の協働状況は、実習中に起きた問題に対して、今ここでどう関わるかといった現在の事柄に対する協働が多く、指導方法をどうしたらよいか、今後の指導の方向など未来を見据えた議論は不十分であることが明らかになった。

指導者と教員は、学生の実習目標を到達するために連携していくことが必要である。教育に対して責任をもつ教員は実習目的や目標に向かって率先して関わって行くことが必要である。結果をみると、教員が3因子とも高く、協調性、情報共有に有意差があったことは協働に対して、教員の意識は指導者よりも高いと言える。しかし、指導者と教員が実習以外のことを話す機会は少なく、互いの資質や能力を尊重し、看護学生の実習目的到達のために意思決定、協調、情報共有を行う協働活動は十分にできていないことが考えられた。

2. 協働に影響する要因について

1) 指導体制

協働に対する認識の高さには実習指導体制が関係していると考え、実習指導体制が専任か兼任かの別で協働への影響をみた。意思決定、協調性、情報共有のいずれも有意差はなかったが、専任は平均得点が高かった。専任者の数が7名と少なかったことも影響したと考えられる。

専任で指導に当たることで互いに話し合いや声かけはしやすくなり、継続的に関わることで学生の変化についても早期に気づくことができる。一方で、看護業務との兼任の場合には、実習指導に向ける時間や関心が制限され、教員との話し合いなどの協働活動の機会は少なく、連携しにくくなる。看護教育の充実に向けて、継続的に学生指導が可能となるよう実習指導体制を整え、指導者と教員の協働を促進していくことが求められる。

2) ユニフィケーション活動との関係

ユニフィケーション活動群および2回以上の参加群が3因子とも高く、協調性に有意差があった。個別項目では、「指導者（教員）と学生への対応を一致させている」「実習指導以外の話ができている」で共通して有意差があり、ユニフィケーション活動への参画や参加が指導上の話し合いができている、実習以外の話も気軽にできていると認識している傾向にあり、ユニフィケーションの場や機会がコミュニケーションを促進し、実習指導の協働に影響を与えたことが示唆される。

教育と臨床がうまく連携するためには、協働の場があることが前提となる。そして、その協働の場に両者が積極的に参加していくことが必要である。今回のユニフィケーション活動は、病棟の部署別研修のプログラムとして大学と臨床が協働で取り組むこととして取り入れた。部署別研修の一環であったため参加しやすい場であったと言える。

ユニフィケーションとして学習会や事例検討の他に、共同研究、人事交流、大学教育への参加についても進めている。大学での教育に臨床側も積極的に関わっていく、同様に大学側も臨床の現任教育をサポートするという意識を共有し、両者が相互乗り入れの関係をつくりあげていく

ことができれば、ユニフィケーション活動の成果が上がり、実習指導の場での協働が一層進み、教育の充実につながっていくと考える。

Ⅵ. 結 論

指導者と教員の協働状況を調べた結果、意思決定、協調性、情報共有において、教員が指導者よりも協働の認識は高く、協調性、情報共有に有意差が見られた。

個別項目で見ると、問題に対する対応については協働できていると認識しているが、指導方針や指導の問題について話し合うなど実習指導の充実に関しての協働は十分ではないことが明らかになった。

ユニフィケーション活動の場や機会が両者のコミュニケーションを促進し、実習指導の協働に影響を与えることが示唆された。

引用文献

- 市村久美子, 旭佐記子, 高村祐子, 他 (2011): 茨城県立医療大学と附属病院のユニフィケーションの取り組み, Nursing BUSINESS, 5 (5), 43-48.
- 椎葉美千代, 齋藤ひさ子, 福澤雪子 (2010): 看護学実習における実習指導者と教員の協働に影響する要因, 産業医科大学雑誌, 32 (2), 161-176.
- 吉川洋子, 梶谷みゆき, 小田原みち江, 他(2010): 教育と臨床のユニフィケーション導入に向けての取り組み, 第5回島根看護学術集会論文集, 54-56.
- 吉村利律子, 梶本市子 (2008): 看護連携型ユニフィケーション, Nursing BUSINESS, 冬季増刊, 122-127.

Relationship Between the Collaboration of Clinical Instructors and Teachers in Nursing Practicum and Unification Activities

Yoko YOSHIKAWA, Teruko ISHIBASHI, Miyuki KAJITANI
Fumiko HIRANO, Emiko TAKAHASHI, Ryoko KAWATA*¹
Kyoko SOTA*¹, Kyoko KANOU*², Eimi OCHIAI*²
and Chikako ITO*²

Key words and Phrases : Nursing practicum, Collaboration,
Practicum instructors, Teachers, Unification activities

*¹Shimane Prefectural Central Hospital

*²Shimane Prefectural Psychiatric Medical Center

吉川 洋子・石橋 照子・梶谷みゆき・平野 文子・高橋恵美子・川田 良子・曾田 教子・狩野 京子・落合 永美・伊藤千加子